

1 あらすじ

いなむらの火は、1854年（安政元年）の安政南海地震津波に際して紀伊国広村（現在の和歌山県広川町）で起きた故事をもとにした物語。
地震後の津波への警戒と早期避難の重要性、人命救助のための犠牲的精神の発揮を説いています。



内閣府作成の紙芝居「津波だ！いなむらの火を消すな」より引用

2 主人公浜口梧陵について。

「いなむらの火」の物語で、主人公のモデルとなった浜口梧陵（儀兵衛）は1820年、房州（現在の千葉県銚子市）で醤油醸造業を営む豪商浜口家の分家の長男として紀州廣村（現在の和歌山県広川町）に生まれ、少年時代に本家の養子になりました。濱口家（ヤマサ醤油）は江戸にも店があ

り千葉と和歌山を行き来するかたわら、34歳ごろに七代目儀兵衛を相続しました。佐久間象山に学ぶほか、勝海舟、福沢諭吉とも親交を深めていました。

3 物語を読んで考えましょう。

地震が発生した時の村の状況

①季節	
②村の様子	
③人々の様子	
④儀兵衛の立場	

【あらすじ1】

秋の稲の取り入れが終わったある日の夕方。村の高台に住む庄屋の浜口儀兵衛は、地震の揺れを感じたあと、津波の来襲に気付く。祭りの準備に心奪われている村人たちに危険を知らせようとする。

【考えましょう1】

あなたが庄屋の儀兵衛だったら、この後どのようにして、人々に津波の危険を知らせますか。



内閣府作成の紙芝居「津波だ！いなむらの火を消すな」より引用

〔自分の考えとその理由〕

考え

理由



内閣府作成の紙芝居「津波だ！いなむらの火を消すな」より引用

【あらすじ2】

儀兵衛は村人に津波を知らせるために、たいまつに火をつけ自分のたんぼの「いなむら」のひとつに火をつけました。火を見た村人は、火を消しに集まってきました。儀兵衛は集まってきた村人を高い所に避難させたのです。

【考えましょう2】

儀兵衛は収穫した稲に火をつける方法をとったのはなぜでし

〔自分の考えとグループの考えを書きましょう〕

自 分	グ ル ー プ

津波災害に備えて